

## 内藤湖南における東アジア観の再検討

### — 先行研究の整理を中心に —

小松 浩平

#### はじめに

本稿は、近代日本の東洋史学者内藤湖南の東アジア観を分析した先行研究を整理・検討し、先行研究において論じられてこなかった点や問題点を明らかにすることを目的とする。

内藤湖南(1866~1934)は<sup>1</sup>、秋田生まれの東洋史学者。秋田師範学校高等師範科を卒業し、北秋田郡綴子小学校の主席訓導となる。同小学校を辞して上京後、『明教新誌』『三河新聞』『大阪朝日新聞』『万朝報』などの記者を歴任する。1907(明治40)年からは、京都帝国大学文科大学講師に就任。1909(明治42)年には教授となり、1926(大正15)年まで東洋史講座を担当した。内藤の業績は東洋史学上において現在でも影響を及ぼしており、近代日本を代表する東洋史学者の一人といえる<sup>2</sup>。

そのため、内藤を対象とした研究は数多くなされてきた。それらは①伝記的に内藤の生涯を追ったもの<sup>3</sup>、②東洋史学上の業績を分析したもの<sup>4</sup>、③内藤の思想を検討したものに大別される。その中でも、本稿は③に分類される先行研究に着目する。近代日本において、東洋史学者の思想が日本人の自国や東洋に対する視点に影響を与えたことは指摘されている<sup>5</sup>。特に内藤は、ジャーナリストから学者時代を通じて新聞などに一般向けの論説を多く発表し、晩年には東洋史の教科書編纂も行なった。こうした内藤の思想を検討した先行研究を整理・検討することは、当時の世論や教育を通じて形成された東アジア観を把握する手立てとなると思われる。

そして内藤の著作中には、当時の日本における中国をはじめ東アジアに対する政策を論じたものもあった。戦後には、こうした著作のなかから内藤の東アジア観が戦前日本の東アジア侵略を肯定しうるものであったとの批判が加えられた<sup>6</sup>。他方、1990年代半ば以後には内藤を再評価する研究が見られるようになる。1996年に谷川道雄が中心となって発足した内藤湖南研究会はそうした機運を高めた要因のひとつである。同研究会が出版した『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』の「まえがき」は、研究会の目的を内藤湖南の思想をありのままに捕捉し、各々の学問形成に役立てることにあるとし「その際どうしても問題になってくるのは、湖南の時事論が中国侵略を正当化する役割を果たしたとする戦後の論調である。それが一種のタブーを形づくって、湖南の思想の全体的解明を妨げることがなかったであろうか。こうして私たちは、このような通念に対しても、向き合わなければならなくなった」と戦後の内藤研究を批判し、研究会をそれに対峙する立場にあることを記している<sup>7</sup>。

しかし、内藤の思想を分析した先行研究は両者ともに問題点があると思われる。そこで、本稿においては③に関わる先行研究を、1990年代半ばまでの研究と1990年代半ば以後の研究とに大別し、

両者の研究内容を検討する。さらに、検討する中で先行研究における問題点を指摘していきたい。

## 1. 1990年代半ばまでの研究

本章では、戦後から1990年代半ばの間に内藤湖南の思想を批判的に分析した代表的研究者である池田誠、増淵龍夫、五井直弘の先行研究を検討していく。

### (1) 池田誠

池田の研究は、内藤の政治論に着目しながら中国・朝鮮・満州に関する内藤の論説を用いて多面的な分析を進めていった点に独自性が存在するといえる。池田は、内藤の政治論に関して「日本の大陸政策が、近代日本の出発のそのときから侵略的な傾向をもたざるをえなかったことを、ただちに帝国主義的な侵略主義と等質のものとして論ずることが正しくないことは、最近の近代日本史の研究によって明らかにされているが、ごく大ざっぱには、内藤湖南の場合も同じことが言えるであろう」<sup>8</sup>と述べている。ここから、池田は内藤の政治論の性格を即座に「帝国主義的な侵略主義」と等質とみなすことを避けていることがわかる。

そして池田は、特に中国に関してはこうした姿勢が見られることを指摘するのである。内藤は日清戦争後の対中国政策の二大論調であった「保全論」と「分割論」どちらにも賛同せず、池田曰く「積極改革論者」であった<sup>9</sup>。それは池田によれば、内藤が日清戦争後における日本の危機と中国の弱体化を一体として捉えているからだという。そのため池田は、日露戦争の4年前である1900（明治33）年の「清国に於る領事官」では「甘肅新疆に五千乃至一万の新式訓練兵あらば、彼の虎耽狼視の邦〔ロシア〕と雖も、頗る後顧の患ありて、其の全力を絶東の経営に竭し難きなり、絶東問題の一部を移して、之を中亜に発せしめば、我邦の幸、果して如何とか為す」<sup>10</sup>と、内藤がロシアの南下という日本の危機を中国の国力増強によって克服することを期待していたことを指摘した。池田は、そうした内藤の思想から「侵略主義、あるいは帝国主義的侵略と結びつけ、それを美化する欺瞞であるとしてかたづけけるのは、必ずしも正当な評価とは言えないであろう」<sup>11</sup>と、単なる侵略主義的性格を見出すことに疑問を呈している。

他方、池田によると、内藤は朝鮮や満洲の統治問題に対して対照的な姿勢を示したという。池田は、1902（明治35）年から1903（明治36）年にかけて内藤が著した「遊清記」を参照しながら次のように論じる。内藤が当時の朝鮮の様子について「本邦植民地の観を呈し」ており、日本人の供給する物品なしには朝鮮人が生活も成り立たない現状を「心地よき限り」と述べたこと、さらに朝鮮の市場の主導権も朝鮮人ではなく日本人にあることについて「嗚呼韓国は要するに我等の外府のみ」と述べたことから、後の日韓併合にもつながる日本の政策を積極的に支持する内藤の一面を指摘した。さらに、満州に対して、内藤は日本から満州に送られた多くの慰安婦を「女性的新倭寇」と表現し、その「女性的新倭寇」が満州に多く存在することで「露国の勢力あるに係らず日本に対する土人の意思は到る処尤も好良」となると続けている<sup>12</sup>。池田は、こういった朝鮮・満州に関する内藤の姿勢を「ここでは議論の余地なく、内藤湖南は、朝鮮および満州にたいする侵略的な膨張

主義者として現れている」と分析している。

以上のことから、池田は、内藤が中国に関しては「帝国主義的な侵略主義」と等質とは言い難い姿勢を見せていたのに対し、朝鮮・満州に対しては明らかに「侵略的な膨張主義者」として現出するその差異を露わにし、内藤の思想における矛盾を指摘した。

## (2) 増淵龍夫

増淵龍夫は、内藤の文化論に着目し、歴史学者津田左右吉と対比させる形で内藤の東アジア観を分析している。増淵は、津田が古代日本における中国からの文化的影響を否定していることを「一面的な外在的批判」であると述べるが、内藤の中国研究は「対照的」であり「中国文化の研究は、湖南にとっては、そこから生れて来た日本文化を知るため、自己を知るためでもある。彼にとっては、中国文化は、自己の外にあるものではない」と、中国文化の日本文化への影響を認め、中国文化の研究が日本文化を知る為でもあったことを指摘する<sup>13</sup>。

増淵は、内藤が1924（大正13）年に発表した「新支那論」で「支那とか日本とか朝鮮とか安南とかいふ各国民が存在して居るのは、各国家の上には相当に重要な問題ではあらうけれども、東洋文化の発展といふ全体の問題から考へると、それらは言ふに足りない問題」<sup>14</sup>と述べたことを踏まえ、内藤においては「国民」の差を越えた東洋文化の発展こそが重要であったと述べる。増淵はこれこそが、内藤の研究・思想における「文化中心移動説」<sup>15</sup>の現れであると論じる。

そして、増淵によると、内藤は「彼の中国史研究の底には、つねに現実の中国に対する強い関心が働いていた」でもあり、歴史研究だけでなく現実の中国に対しても文化主義を適用するのである。増淵は、内藤の現実的関心というものは日本の存立をかけた大陸侵出とそれに関連した「支那問題」であると説く。増淵は「新支那論」における「日本の経済的運動は、この際支那民族の将来の生命を延ばす為には、実に莫大な効果のあるものと見なければならぬ。恐らくこの運動を阻止するならば、支那民族は自ら衰死を需めるものである。この大きな使命からいへば、日本の支那に対する侵略主義とか、軍国主義とかいふ様な事の議論は、全く問題にならない」<sup>16</sup>という、内藤の主張に注目している。その上で、増淵は内藤においてはこういった日本の文化的使命である大陸侵出は内藤の文化主義と抵触しないばかりか、むしろそれを正当化したと論じる。上記の通り内藤の文化主義は「民族主体から切りはなされた文化の尊重であり、中国民族の主体性の尊重は伴わな」いのであり、文化の尊重のためには中国侵略は正当化されるという図式を増淵は提示した。同時に増淵は、内藤のこうした「民族主体から切りはなされた文化の尊重」という思想は近代日本に対してもった大陸侵出の要請のはかり知れない重さがあったのであり、当時の時代感覚から完全に自由ではなかったとしてその限界性を指摘している<sup>17</sup>。

## (3) 五井直弘

五井直弘は、1928（昭和3）年の内藤の講演を記録した「近代支那の文化生活」における「私は政治といふものは人間の生活の中では原始的の下等な事だと思って居ります」と、始まる一文に注

目している。すなわち、内藤は、政治の主なものとは支配であり蜂や蟻、牛や犬でさえ充分支配権を持っているのだから、政治というのは譬えていうなら「人間に尾軀骨がある位のもの」としている<sup>18</sup>。ここから五井は、内藤が政治ではなく文化を中心に考えたため「支那上古史」緒言中の「余の所謂東洋史は支那文化発展の歴史である」<sup>19</sup>という一文にも、文化を中心に据えた内藤の思想が表れており、同時に内藤の中国文化礼賛でもあると捉えた。

そして、五井は日本の中国侵略を即座に正当化することを批判的に論じる内藤の姿勢も見出している。内藤は「支那の現状」において「日本には支那侵略論があつて、支那の如き厄介な国は、速かに占領して属国にしてしまへ」と云ふ過激論者もあり、軍人等は殊に然りであるが、自国の経済を破壊し、自国を滅亡に導くが為めに、支那を占領するが如きは深慮ある政治家の能く為し能はざる所である」として「深慮」なく日本が中国を侵略する事を批判し「支那の政治を外国人に委任したとて、これが直ちに支那を滅亡に導くものでは決してない。〔中略〕兎も角日本人は目を閉つて、少くとも十年なり、十五年なり支那の政治を外国人に任すが宜い」と、日本はもう中国の侵略など考えず中国の統治は「外国」に任せた方がいいとまで述べている<sup>20</sup>。これを五井は「中国放棄論」と規定している。しかし、この「中国放棄論」は侵略の主体が日本から「外国」に替わっているだけであり、内藤は侵略そのものを否定していたわけではない。五井はそのことを増淵の提唱した内藤の「個々の民族を超えた文化史的観点」に依拠した上で「〔下等な〕政治や経済の面での外国人による中国の管理、日本人による中国支配を肯定した。『軍国日本』に対する嫌悪を秘めながら、結果的には侵略戦争を肯定した」<sup>21</sup>と、内藤の日本の軍事面での嫌悪と、諸外国が政治経済的に中国を管理する事や日本人による中国支配に対する賛同という矛盾を指摘し、その姿勢に対して批判を加えた。これは、増淵と同様に民族差を超えた文化主義により侵略を正当化する図式を指摘したものと見える。

以上、1990年代半ばまでの研究を整理した。1990年代半ばまでの研究は、内藤の論説から内藤の東アジア侵略を肯定しうる側面を指摘したが、全面的に侵略を肯定するものとは捉えなかった点を共通する特徴として挙げる事が出来る。池田は、「清国に於る領事官」中、内藤が日清戦争後にはある種日本が中国と共闘することを期待していたかのような主張をしていたことに注目し、これを単に「侵略主義、あるいは帝国主義的侵略」と結びつけることを避けている。そして増淵・五井らが主張した内藤における「民族主体から切りはなされた文化の尊重」は、文化主義と一体となった侵略主義という限定的なものであった。

## 2. 1990年代半ば以後の研究

1990年代半ば以後、それまで内藤を批判的に論じてきた研究者とは違い内藤の東アジア観を再評価する研究が登場する。本章では、そうした1990年代半ば以後の代表的研究者を挙げ、研究の特徴をみていきたい。

## (1) 谷川道雄

谷川道雄は先にみた増淵の研究を批判し、内藤の思想の再検討を試みている。谷川の研究は、内藤の思想の中心がアジアや人類の発展に寄与することにあつたとする点が特徴的である。

谷川は「日本が先頭に立って新しい東洋の学問—広く言えば文化とも置き換えられるであろう—を創造し、それが将来の世界文化に寄与すべきこと、そしてそれは中国文化が主軸となる」といったものが内藤の理想であつたとしている。内藤の思想の中心に文化があつたとしている点は増淵らと共通するが、谷川は内藤の文化を中心とする思想はあくまで世界文化の寄与にあつたと主張する。したがって、戦後の内藤研究については「一方には東洋学の不世出の巨匠として、他方には、現実の政治論において誤りを犯した人物として、相反する二つの評価を担うことになった」<sup>22</sup>であつたとして、谷川はこの「現実の政治論において誤りを犯した人物」という部分を論点としているといえよう。

内藤の文化論に関して、谷川は「いうまでもないことながら、日本列島の文化は、大陸文化の受容によって育成され発展してきた。その発展のレベルを湖南が高く評価していることは〔中略〕随所に見出すことができる」<sup>23</sup>と述べている。そして、谷川は西欧文明の摂取に成功した日本の「天職」として東洋文化の発揚を願おうとする「天職論」が明治20年代頃から知識人を中心として存在していたが、内藤も同様の考えを有していたと続ける。谷川はこうした「天職論」を踏まえて「一口に言えば、日本が平和的、経済的に中国に進出し、その古い体制を破壊して中国民衆の力の伸長を可能ならしめることを、彼はねがったのであつた」と、内藤を捉えている。

先に見たように、1990年代半ばまでの研究者は概して中国侵出に関する内藤の思想を批判的に分析していた。増淵や五井は、内藤が「民族主体から切りはなされた文化の尊重」により日本の大陸侵出を肯定したとしており、上記のように内藤は日本が中国に侵出することで中国民衆の力を高めようとしていたとする谷川の見解とは相反する。谷川はこうした内藤の日本文化形成に関する視点を述べた上で「湖南においては、現代日中関係論もまた、東アジアの巨大な文化交流の歴史の延長上に構想されていたことを、知り得るのである」<sup>24</sup>と続けている。そして、谷川は内藤の中国論を考察したうえで「その中国文化への高い評価は、決して偏狭固陋なアジア主義に出たものではなく、人類文化の発展という普遍的見地に根ざすものであつた」<sup>25</sup>とした。こうした内藤の文化を中心とする思想が人類の発展のためにあつたとする谷川の見地は、内藤の文化を中心とする思想が侵略を肯定しうるものであつたとする増淵や五井の主張とは対照的である。

## (2) 藤田昌志

藤田昌志も内藤の再評価を試みた論者である。そして、その見解は他の研究者では示されてこなかった独自のものがみられる。

藤田は、内藤が「世界を序列で見ず、国家を究極の目的とせず、東洋学のリニューアルを目論んでいた」<sup>26</sup>人物であつたとしており、こうした認識のもと西洋のものを中国に広め中国の旧物を西洋に伝えるのではなく、あくまで「中国尊重の上で日本の独自性を発揮していく」という「天職論」

を内藤が有していたと述べる。藤田は、日本が欧米追随の道とは異なる道を歩むことを内藤が願っていたと考えているのである。そして、上記のように内藤が序列意識を持たずに世界を見ていたというのは先行研究においても述べられてこなかった点であり、藤田の独自の見解が示されている。

そして藤田は、内藤は「開かれた国粋主義者」や「普遍主義者」であり、その上で中国論を展開していったと述べる。そして、日中双方の独自性を見出している内藤の中国論は、中国に対する感情的な差別の色合いが感じられないと続ける。その理由を「時代の雰囲気とは一線を画する、真の自由人であった」<sup>27</sup>からだとしている。これまで検討してきた池田、増淵、五井は、内藤の思想においては東アジア侵略を肯定しうる性格があったことを指摘している。ところが、藤田の研究で見られた内藤の思想は日本の近代における帝国主義的側面に束縛されていなかったというものであり、これも既存の研究に見られない見解が示されたものといえるだろう

そして、藤田は「内藤湖南のように新しい中国論、そしてそれと不即不離の日本論（逆も又真）を創出した人もいた。こうした人のいたことを日本にいる我々（日本人だけでなく日本にいる人々）は誇りにしてもいいのではないかと思う」と、内藤の日中論の独自性を主張するのである<sup>28</sup>。

以上、1990年代半ば以後の研究を整理した。谷川は、日本により中国侵出が推し進められることを内藤が期待していたことを「中国民衆の力の伸長」を願っていたためであるとした。こうした考えは、内藤の文化を中心とする考えが世界文化発展の為にあつたとする谷川の持論に基づいている。藤田はいずれの先行研究においても示されてこなかった世界の序列や国家といったものに縛られない「自由人」としての内藤を見出しており、こうした点は藤田の研究における特徴といえる。

## おわりに ―先行研究の問題点と今後の課題―

これまで、内藤の思想を分析した研究を、1990年代半ばまでの研究と1990年代半ば以後の研究に大別し検討してきた。本章においては、両者の先行研究の考察をしたうえで問題点を明らかにするとともに今後の課題も述べる。

### (1) 先行研究の問題点

1990年代半ばまでの研究者―池田、増淵、五井は、内藤を「帝国主義的な侵略主義」として捉えることを避けつつも、内藤の東アジア観における矛盾点を批判していた。ただし増淵と五井は日中に関する内藤の論説にのみ注目していたが、池田は二者と違い日本・中国・朝鮮・満州といった国や地域に関する内藤の論説にも注目した点で独自性を有している。

内藤の朝鮮・満州に関する論説に注目すれば、池田が指摘するような明らかに「侵略的な膨張主義者」としての性格を露わにし、蔑視的な視点をそこに見出すことが出来るのである。だが、池田が注目したのは内藤の論説の中でも政治論が中心であった。以下の通り、内藤は政治論に限らず民族・文化・歴史といった点においても朝鮮を蔑視的に批判している。

民族論に関して、内藤は「日本文化とは何ぞや 其一」において国民の自覚は常に政治的に最

も早く生ずるが、真の文化的思想的に自覚を生ずるのは是より遙に遅れるのが常である。時としては自覚を生ぜずして終った国もある、朝鮮の如きは夫れである。日本民族は流石に或る時代には思想的自覚を生じた」<sup>29</sup>と、朝鮮人に比して日本人が「優秀」であることを主張する。さらに、内藤の思想の中心ともいえる文化史に関しては、日韓併合後、日本の植民地となった朝鮮の統治方針について述べた「朝鮮統治の方針（上）」中で「我国の歴史家までも時としては誤つて古代日本文化は朝鮮人の開発に負ふ所が多いと考へたりする人があるけれども、実は朝鮮人は支那の文化を我国に取次いだのみの事であり、他国に感化を及ぼす程の優秀なる自国文化を嘗てもつたことは無い」<sup>30</sup>と、朝鮮から日本への文化的影響を否定している。これは、増淵の節で述べたような中国から日本への文化的影響を認めた姿勢と対照的である。

1990年代半ばまでの研究者と同様に、谷川も侵略を肯定する傾向にあった内藤の姿勢は認めている。日露戦争の開戦時、内藤が主戦論者であったことは知られているが<sup>31</sup>、同時期には主戦論者としての立場に基づく多くの対外政策に関する論説を発表していた。こうした内藤の姿勢については、谷川も「帝国主義時代という時代環境をぬきにして、国家の政策を定めることはできないというのであって、湖南特有の現実論がここに顔をのぞかせている」<sup>32</sup>と述べており、内藤が主戦論を有していたことを認めている。しかし谷川は、内藤がそうした現実論（主戦論）を有しつつも、あくまで東アジアひいては人類全体の発展に寄与することを思想の中心として据えていたと主張する。

藤田は、内藤が世界の序列や時代感覚といった固定観念に束縛されない「自由人」だったとその独自性を強調する。だが、やはり先行研究全体に共通する問題点は、その分析が日中に関する内藤の論説にのみ注目している点にあると思われる。本稿で検討したように、朝鮮・満州に対する内藤の思想は侵略を肯定的に捉え、明らかな蔑視傾向にもあったといえる。したがって、谷川の主張するように東アジアという範囲に限定しても内藤がそうした地域の発展を模索していたとは考え難く、ましてや人類全体に適用し難いのは明白であろう。そして、検討した内藤の朝鮮・満州に関する論説を踏まえると、世界の序列化からも時代感覚からも「自由人」として内藤を捉えることは難しく、こうした点は藤田の研究における問題点といえる。

このように、内藤の日中以外の朝鮮・満州といった国や地域に言及した論説からは、「侵略的な膨張主義者」といった性格やそうした国や地域に対する蔑視的な視点を見出す事が出来る。池田は日中以外の国や地域も含めた議論を踏まえた上で内藤の政治論に注目し分析を進めているが、民族・文化・歴史といった範囲にまでその分析射程を広げていない。

本稿においては、内藤が日中に関しては中国から日本への文化的影響を認めるといった姿勢を見せながら、それ以外の地域に関しては日本の侵略を肯定し蔑視的でもあったというその矛盾点を指摘した。こうした、日中以外の地域も踏まえた内藤の思想分析を試みた先行研究は少なく、本稿に挙げた研究者に限れば池田が一部触れるのみである。

## (2) 課題

以上、本稿は先行研究の整理・考察を進め問題点を指摘し、従来あまり論及されてこなかった内藤の思想における矛盾点を指摘した。そして問題点や矛盾点を指摘する上で、特に日中以外の国や地域に関する内藤の論説に注目した。ただし、本稿が対象にした論説は一般向けのものであったため、学術的な著作の検討を行なう必要がある。一般向けの論説と学問上の見解の対応関係は今後考察していきたい。

また、先行研究が取り扱った史料に関しては、今回は日露戦争から内藤の定年退官前後に該当する 1900~1920 年代のものが中心となっている。これは、先行研究の趣旨が内藤の東アジア観の検討にあり、日本の対外政策が活発となったこの時期に研究の焦点を当てたからだと思われる。内藤の思想の全体像を把握するために、より幅広い時期の思想の検討も必要となるだろう。

## 〔注〕

- 1 内藤湖南（1866~1934）は、近代日本の東洋史学者。代表的な著作は『支那史学史』『日本文化史研究』など。論説は「近世文学史論」「新支那論」「応仁の乱に就いて」などが有名（『国史大辞典』第 10 巻、吉川弘文館、1989 年、pp.516-517 を参照）。
- 2 内藤が後世に影響を与えた代表的な学説は、宋以後を近世とする「唐宋変革論」、古代史は後世に降るほど逸話や伝説が付け加えられる（加上される）ものであるとする「加上説」などである。東洋史に限定すると「唐宋変革論」が代表的といえるが、この学説は内藤の生前は注目されなかった。戦後、京都大学助教授であった宇都宮清吉により時代区分の不明瞭さを指摘・批判され注目されることとなる。この宇都宮論文を契機として前田直典や宮崎市定ら東洋史学者により時代区分の論争が展開された（同上『国史大辞典』、砺波護・藤井譲治編『京大東洋学の百年』（京都大学学術出版会、2002 年、pp.95-96）を参照）。
- 3 内藤湖南の伝記的な研究は、安藤徳器『西園寺公と湖南先生』（言海書房、1936 年）、高橋克三編『湖南博士と伍一大人』（石川伍一大人・内藤湖南博士生誕記念祭実行委員会、1965 年）、青江舜二郎『竜の星座―内藤湖南のアジア的生涯』（朝日新聞社、1966 年）、千葉三郎『内藤湖南とその時代』（国書刊行会、1986 年）などがある。
- 4 小川環樹『日本の名著 内藤湖南』（中央公論社、1972 年）、葭森健介「内藤湖南と京都文化史学」（内藤湖南研究会編著『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』河合出版、2001 年）など。
- 5 『AERA Mook 10 歴史学がわかる。』朝日新聞アエラ発行室、1995 年、p.119。
- 6 小野泰「内藤湖南と同時代―日本の天職論をめぐる」前掲『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』、pp.106-107。
- 7 谷川道雄「まえがき」前掲『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』、p.7。
- 8 池田誠「内藤湖南の国民的使命感について―日本ナショナリズムの一典型」『立命館大学人文科学研究紀要』第 13 号、立命館大学人文科学研究所、1963 年、pp.82-83。以下、特に断りがない限り、池田の内藤研究はこの論文に依る。
- 9 同上、p.86。
- 10 内藤虎次郎「清国に於る領事官」『内藤湖南全集』第 2 巻、筑摩書房、1971 年、p.149。



- 11 前掲池田論文、p.87。
- 12 内藤虎次郎「遊清記」『内藤湖南全集』第4巻、筑摩書房、1971年、pp.328-346。初出は、『大阪朝日新聞』1902年10月26日、1903年3月2日付。
- 13 増淵龍夫『日本の近代史学史における中国と日本』《リキエスタ》の会、2001年、pp.57-59。初出は、「日本の近代史学史における中国と日本（Ⅱ）—内藤湖南の場合—」（『思想』第468号、岩波書店、1963年）。以下、特に断りがない限り、増淵の内藤研究は同書に依る。
- 14 内藤虎次郎「新支那論」『内藤湖南全集』第5巻、筑摩書房、1972年、p.508。初出は、内藤虎次郎『新支那論』（博文堂、1924年）
- 15 「文化中心移動説」は、文化の中心はあらゆる要因から国の区別に関係なく移動するというもの。内藤は国の区別に関係なく文化の中心は移動することに基づき、「新支那論」では東洋文化の中心が今や中国以上の強国となった日本に移動したとしても何ら不思議なことではないと述べている（同上、pp.508-509）。
- 16 同上、p.513。
- 17 前掲増淵論文、p.91。
- 18 五井直弘『近代日本と東洋史学』青木書店、1976年、p.134。以下、特に断りがない限り、五井の内藤研究は同書に依る。
- 19 内藤虎次郎「支那上古史」『内藤湖南全集』第10巻、筑摩書房、1969年、p.9。初出は、内藤虎次郎『支那上古史』（弘文堂書房、1944年）。
- 20 内藤虎次郎「支那の現状」『内藤湖南全集』第5巻、pp.24-25。初出は『神戸新聞』1918年5月6、7、9日付。
- 21 前掲五井論文、p.138。
- 22 谷川道雄「序説」前掲『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』、p.34。以下、特に断りがない限り、谷川の内藤研究はこの論文に依る。
- 23 同上、p.30。
- 24 同上、p.31。
- 25 同上、p.33。
- 26 藤田昌志「内藤湖南の日本論・中国論」『三重大学国際交流センター紀要』第3号、三重大学国際交流センター、2008年、p.18。以下、特に断りがない限り、藤田の内藤研究はこの論文に依る。
- 27 同上、p.40。
- 28 同上、p.41。
- 29 内藤虎次郎「日本文化とは何ぞや 其一」『内藤湖南全集』第9巻、筑摩書房、1969年、p.15。初出は、『大阪朝日新聞』1922年1月5日～7日付。
- 30 内藤虎次郎「朝鮮統治の方針（上）」『大阪朝日新聞』1920年1月9日付。なお、この論説は『内藤湖南全集』に未収録である。
- 31 前掲『京大東洋学の百年』、p.78。
- 32 前掲谷川論文、p.23。

